

●座談会●

バックラッシュに向き合うために

「ジェンダー/ジェンダーフリー」再点検 (下)

ご出席者 (発言順)

細谷実 (ほそや・まこと) さん

関東学院大学経済学部教授

哲学, ジェンダー論

金井淑子 (かない・よしこ) さん

横浜国立大学教育人間科学部教授

倫理学, ジェンダー論

広瀬裕子 (ひろせ・ひろこ) さん

専修大学法学部教授

教育行政学, セクシュアリティ論

(Sexual Science06年7月号から続く)

●バッシング派と重なる「憂い」

編集部 繰り返しになると思いますけど、お話を戻してみると。自民党の「過激な性教育・ジェンダーフリー教育批判」のシンポに行ったり、バッシング派の講演を聞くと、なかなか興味深いんですね。「凛々しい青年がいなくなった」とか、彼らは現在の日本社会をさまざまに憂えている。

愛国心とか、どうとかは私の気持ちと違うけれど、彼らの憂いと私の憂いで重複するものもあるなと思う。ただ、彼らはその原因を性教育やジェンダー教育に押しつける。その結論が私とは正反対になる。

細谷 たとえば重複するのは、どういうところになりますか？

編集部 凛々しい青年がいないというのは笑ってしまうけど、若者の軟弱さには、オジサンとしては憂える(笑)。それはともかく、たとえば援助交際とかSTDとかでしょうか。

金井 性行動の低年齢化とか、ね。それに対して、由々しき状況だと自民党的なセンスで思うのか、それともリベラルな市民的センスで思うのかの違いはあっても、彼らが危機意識をもっているのも分からないではない、ということでしょう？

編集部 ええ。彼らは「自己決定なんて言ってるから、高校生が体を売る」、ということになる。

細谷 それは一部当たっている面もあるんじゃないでしょうか。少なくとも

も、女の子は言い訳のために自己決定論を言うようだし。ま、「自分の体をどう使おうと勝手にしよう！」というのは、僕が子どものころからすでに「非行少女」が使っていたせりふですけど。

編集部 でも社会の成熟というか、経済的な成熟、メディアの発達で、それは現代社会の.....。

細谷 でも10代の妊娠なんか、昔からあったでしょう。

金井 それは別の話でしょう。

由々しき状況は性教育が作り出したのだと、原因を性教育に帰するけど、原因はもっとより大きな状況にありますよね。その矛先が専らフェミや性教育に向けられているということであって、問われているのは、フェミノ側もいまの状況を決してよしとするわけにはいかないでしょう。だとすれば、どういうことを立てていけばいいのか。

ですから、いまやっている性教育が.....そういうことと言えば、お人形さんを使ってというのが、私もかなり抵抗感があったんだけど。

細谷 最初に少し出てきた若桑さんの議論と同じ？

金井 共感できるような気もする。若桑さんは、美的な意味でよくないと言われている。

細谷 そもそも人形というのは、人間のモノ化である、と。人形を愛するというのはネクロフィリア（死体愛好）の一種である、と。そういう主張だと思う。

広瀬 じゃあ、授業中に実物を使おうってこと（笑い）？

細谷 僕も、そう言おうかと思ったんだけど。人形でなければいいみたい、絵とかならば。そうおっしゃっていた。

金井 じゃあ、私はそれとも違うこだわりとして違和感を感じていただけ。でもどういう手法がいいのかという対案はない。でも、そういうことを含めて、こちら側の性教育とかジェンダーフリー教育の実践論は、大いに改善の余地があるのではないかしら。

広瀬 現在の性教育が完成されたものだというわけではありませんから、そういう余地はあるでしょう。でもこと性教育に関しては、授業で実物を使うのはむしろかしく、教材というのは重要なんです。効果と使いやすさを考えながら、苦労して作られてきているんだっていうことは知ってほしいと思う。

細谷 性教育の方法論はまだまだ未完成なものであり、若桑さんの問題提起も含めて大いにみんな議論していこうという流れが、シンポジウムの

最後にはできたと思う。

●ポリティカリー・コレクトが多い

編集部 で、また話が変わってしまうと、フェミニズムの中での、よい意味での相互批判というか、仲間から異論が出ると排除するというか、批判を検討する度量がないような.....フェミニズム系の人たちにそれが目立つ印象があるんですが。

金井 フェミニズムの正義が異論を制しているという捉え方ですよ。それはジェンダーPC（ポリティカリー・コレクト）があまりにはびこっているのではないかと、かねてより私は言ってきているんですが。

広瀬 フェミニズムにはそれがありますよね。めっちゃめっちゃあると思いますよ。

細谷 なんであれ、運動を熱心にやってる人って、だいたいそうでしょ。

編集部 願望としては、であるからこそ、それを超えてほしい。

細谷 でも逆に、いま、こんなにバッシングがあるのに、細かなことを批判するなど、そうなりますよね。

編集部 やっぱ、「であるからこそ」と言いたいけど.....どう考えたらいいんでしょうか。

細谷 大問題ですね。

金井 ただ、フェミニズムの業界がそんなに、中で足を引っ張り合うような対立をしているわけではない。むしろ、大きく言えば、フェミニズムのメインストリームの主張と、マイノリティ・フェミニズムの側からのメインストリーム批判という形の対立構図としてはあるかもしれない。

広瀬 メインストリーム争いは、あるね。

金井 メインストリーム争い、ということではないでしょう。障害をもっている女性たち、レズビアン女性たち、さらにまた「在日」女性たちの側からの、日本のフェミニズム・女性学の「自民族中心主義」の傾向に対する批判はあります。

「多様なフェミニズム」といったテーマ立てで、それぞれの問題を考えましようといった議論の中で、フェミニズム内部の差異と力関係を平準化して「様々な」とか「多様な」と語ってしまうようなところで、猛烈な反発が返ってくることもある。

フェミニズムの中のマイノリティとの関係において、女だったら女としての痛みは分かり合える、みんな連帯できるという幻想を元に運動を作ってきているフェミニズムの主流の側の問題ですよ。

広瀬 どちらかというといふマイノリティ・フェミニズムの主張のほうに誰も反論できない「正義」があるというような、私はそれを「被抑圧者の権力」と呼んでいるのだけれど、そういう暗黙の力関係はあるでしょう。そういう意味でマイノリティ・フェミニズムのほうが、スタイルとしては主流視されていると言ってもいいようにも思うわけ。

金井 でも、主流のフェミは、そのように受け止めてないから。

広瀬 そうかなあ。

金井 理論的にはそうですよ。そっちのほうが理論的に深化しているから。

細谷 マイノリティ的な主張を取り入れていない主流って、だれなのか。ひとたび平等、人権、反差別などの原理を承認すると、マイノリティ的な主張には正義があるから、否定はできない。で、多かれ少なかれ、結構、みんな取り入れていると思うんですよ。ただし、それでその主張が主流化されるわけではなく、とりあえずただ目配りされてくるだけ。

金井 そう、とりあえず目配りされているだけという、そういうスタンスに苛立ちが表明されているんですよ。様々なマイノリティ女性たちの問題をあらかじめ「かれらの問題」として他者化して、それを語らせ・聞いて・理解する、あるいは同情するといった主流のフェミのマイノリティ・フェミニズムとの関係性の取り方に。

だから、フェミニズム・バッシング状況に対して、フェミの中で対立し合っちゃあダメじゃないかといった問題や、フェミの中の運動の側と理論やってる人との対立といったことは、ちょっと違うレベルの問題として、実はフェミニズムという思想の根幹に関わる重たい課題だということは補足して確認しておきたい。

●バックラッシュは「わら人形」？

金井 お話をちょっと整理してみると、ジェンダーフリー教育と性教育の流れは必ずしも同じでないということ、何が彼らをして、反発させているのかは、いままでの議論でだいたい出ましたよね。

私は、今日の座談会のことを考えてみたら、どこにバックラッシュはあるのか。そういうふうを立ててみたんだけど、バックラッシュって、結

局、いま、この間の議論をみると、もしかしたらわら人形というか.....実態がないのかな。なんてことはないでしょうけど。

広瀬 私は、こういうふうにしたのね。保守派は「ジェンダーフリーは性差をなくそうとしている」と言う。確かに昔、そういうことは言っていたけれども、でも彼らはそういう主張をする人を直接突かないんですよ。そうじゃないところを突く。たとえば、参画基本法とか政府とか。そんなところが、性差をなくそうなんてこと言うわけじゃない。だから突かれたほうも、身に覚えのないことですから戸惑うでしょう。

金井 でも、それは逆でしょ。彼らは「性差をなくそうと、そういうことを言わせている思想的なオリジンが、行政の中に入り込んだ大沢真理（東大教授、政府の男女共同参画審議会で活躍）のようなフェミクラートだ」と言う。それは正しいですよ、まさにそうなもの。

細谷 つまり、こういうこと？

性差否定をフェミニズムの中心原理（中心課題）として語っている人も確かにいますよ.....いるとしましょう。しかし実は多くのフェミは性差否定をそれほど中心原理だと思っていないのに、「中心原理に違いない」ということにしてバックラッシュが攻撃している。こういう話なんですか？

広瀬 構図としてはそんな感じでしょう。現実的に力をもっているのが、行政ですから、そこを何とかしないとイケないと思ったのだろうと思う。でも、行政あたりで言っていることは過激でもないし、だれでも言っていることとあまり変わらない。

でも、それじゃあ批判対象にならないから、市民社会的には、力はないけれども、ラディカルなフェミニズムの言説をつなげて、行政があんな過激なことをやろうしていると宣伝する。それが戦略なんじゃないかと。

細谷 そうすると、「ああいうラディカルなことと、内閣府は関係ありません」という猪口さん（猪口邦子内閣府特命担当大臣、少子化・男女共同参画）みたいな言い方が正しいことになるよ。

広瀬 そういう言い方、しているっけ？

細谷 そうでしょ？

金井 内閣府はジェンダー概念をあれほど切りつめることによって、攻撃をかわそうとしているのだから、そうですよ。バックラッシュ派が攻撃しているのは、行政がフェミニズムに乗っ取られていると認識しているからでしょ？。

だから彼らも行政の審議会などに入ろうとしている。石原都政下などでもいまバックラッシュ派の急先鋒の高橋某氏を男女共同参画審議会に入れようとしている。

広瀬 乗っ取られているって言ったって、権力を取るということは、一般論として、ラディカルな形では権力取れるものではないでしょう。権力にたどり着いた時点ではもうだれでも反論できないような形になっているわけで、だからこそ権力になるんじゃない？

金井 だからこそバックラッシュ派は、危機意識をもっているのですよ。男女共同参画社会を推進する「基本法」までできてしまったことだから。

編集部 金井さんの問題提起に別のことを思っていて。バックラッシュ派は何を恐れているのかですが、それは「理想の家族」の解体なんだろうと。

お父さんは家族の柱であって、お母さんは――彼らは口が裂けても専業主婦であるべきだとは言いませんが、とにかく育児や家事に手を抜かない。もちろん夫婦別姓とか事実婚なんて言わない。子どもたちは「不純異性交遊」なんて無縁で勉学にいそしむ。

ところがジェンダーフリーとか性教育とかでは、家族の多様性なんて言うから、シングルマザーとか、ひどくなると同性婚なんて言い出す、と彼らは考える。

金井 でも国家自身が共同参画路線で、お父さんが働いて、お母さんが家を守ってという「家族」像を崩そうとしているわけですから。ということは、これまでの企業中心で企業が男女のライフスタイルを管理する、という形で性別役割分業を作ってきた日本の家父長制がもう維持できなくなっていることを意味するのであって、それを国家が主導する形で新しいライフスタイルが提案されてきている。

ですから私は、国家によるライフスタイル管理型家父長制と捉えた時に、そこにまさにフェミニズムが国家や社会と連携して新しい構造改革路線を作ろうとしているんだと思う。もちろん小泉構造改革にそのまま乗ってということは考えられないけれど。バックラッシュ側からは、これがフェミクラートによる国家支配のように映るんでしょう。

バックラッシュ派は、この企業中心のライフスタイル管理型家父長制システムの制度疲労というかジェンダー秩序の現実的解体を見ないで、家族を復活させようと対応しているわけ。ほんとうはもはや男女共同参画社会の流れは不可逆的な動きと思えたんだけど.....楽観論かしら？

細谷 現実的基盤や条件がないのに、過激な集団が盲動してこれまで様々な悲劇を生み出してきたことは歴史が教えていることですから、僕は悲観論に傾いています。

広瀬 私は、多少バックラッシュ的動きが影響するとしても、バックラッシュ派が主張していることを聞いている限りでは、「揺り戻し」があったとしても再「性別役割分業」化にはならない気がする。

子育てや家族の中での「幸せ」のようなところを「手抜き」しない限りでの多様な生き方の模索、といったあたりが当面の落としどころになってくのではないかと思っていて、そういう意味では、大きな流れは変わらないだろうという楽観論かなあ。

●性教育から健康教育へ撤退？

編集部 私も、その楽観論のほうなんです。ただ、性教育がこれほど叩かれるとは思っていませんでしたね……。また話が性教育に移ってしまいましたが、性教協は路線を転換するようですね。06年1月の性教協セミナー（理論と実践講座）で、幹部が健康教育へのシフトを提案していました。<http://www.medical-tribune.co.jp/ss/2006-3/ss0603-2.htm>

七生養護学校への攻撃は有名ですが、関係者に聞いてみると、攻撃はもっと陰湿で多岐にわたっている。たとえば性教育関連書籍を現場の教員たちが出版すると、校長に呼び出される。原稿料はどうなったか、いつ執筆したのか——ここまでは、とくに公務員だと、質問に合理性がある。

それに加えて、どんな資料を使ったのかとか、あれこれ、ねちねちやるようで、それに参ってしまう。会員は減少傾向にあるようです。それで攻撃をかわすために健康教育路線にシフトする。

細谷 その場合の健康教育の内容はどうなるんでしょう。

編集部 そのセミナーでは、月経教育とか、STD予防などの話が中心だった。私の解釈では、性の多様性とか、性の自己決定とかには触れない、ということでしょう。

広瀬 ただ、世界的に見ても性教育は健康教育の中の重要な部分という位置づけという側面もあるわけで、健康教育と銘打ったということだけだったら、中身が薄まる可能性、あるいは危険性とみるのではなく、性教育が発展的に拡大する流れ、と解釈したっていい。

金井 でも、それは「ジェンダーフリーという言葉は使わないようにしましょう」という流れと、同じ流れでしょうね。

広瀬 言葉は使わなくっても、実を取ることは、やろうと思えばできるんですよ。ただ、それを担っている人がそう思わないで後ろ向きになってしまったりすると、だめですけど。

細谷 関東学院大学では、このSexual Scienceでも紹介してもらったように、まさに「性の健康学」というタイトルの授業をやっています。その4本の柱の1つに、性的マイノリティへの理解を深めるというのがある。こ

れは性の健康として、メンタルな健康として不可欠だと思うから、そこに入れてみる。

<http://www.medical-tribune.co.jp/ss/2004-12/ss0412-1.htm>

金井 ちなみに、その4本柱というのは、ほかに？

細谷 1つは、性感染症の予防と感染した場合の対応。2つ目が望まない妊娠の予防と妊娠した場合の対応。3つ目が性的マイノリティへの理解を深め差別をしないように。4つ目が性暴力の加害者にも被害者にもならないように。

編集部 私立の大学なら、かなり自由にできるでしょう。これが公立の中学・高校だと、性の多様性とか自己決定とか、狙われるわけです。

細谷 性的自己決定権については、実はこれも曖昧に使われている概念だと思うんです。具体的にはどういうことを言うのか。ジェンダーが多様性をもって使われる概念だということと、かなりパラレルで曖昧。だれかきちんと論じている人がいるんでしょうか。というのは、僕は自己決定権には基本的に賛成するけれど、反対する部分もあってケースバイケースだと思っています。

たとえば中学生にはセックス禁止してもいいと思っています、自己決定権などない。ある時、フェミ系のある集会でそう言ったら、みんなからバッシングされてしまった。なんか自己決定原理派みたいな感じでしたね。しかし思うに、自己決定は素晴らしいとして、それを全肯定するのはまずいんじゃないかと。

広瀬 まずいだけじゃなくて、結構、自己決定というのは過酷なことでもありますよ。「あなたが自分で自分の責任で決定しなさい」と強いていることでもあるわけで。でも、それって、なかなかできることではないですよ。自分のことだから簡単に決定ってできることばかりじゃない。現実にはいろいろな選択肢の間で、気持ちが揺れてみたりもするものなんだと思う。

細谷 「自己決定能力」と「自己決定権」を、第1には分けて考える必要があって、前者の養成は、性教育の大きな課題だと思う。

広瀬 洪水のようにあふれている雑多な情報の中から、価値ある情報を選びとる能力とか、そうやって得た情報を具体的な場面で使えるようになる能力とかね。情報処理能力、とかね。

細谷 結果予測能力とか、目的設定能力とか、優先順位能力とか、手段選択能力とか、コミュニケーション能力とか、誘惑に負けない強い意志とかーこれ、なんだか、昔の性教育にあった言葉だけど（笑い）。そういうのは「能力」に関わる。小中学校からきちんと教えていくべき能力的課題です。

他方、自己決定権で権利論を展開しちゃうと、「援助交際して、なんで悪い!？」みたいな話になる。そのへん、まず分けて考えたほうがいいけど、それをきちんとやっているんでしょうか？ 自己決定能力と自己決定権を。分けて。

編集部 不勉強ですが、私の知ってる範囲では、そのへんの議論は聞きません。

細谷 そうだとしたら、基本的なことがしっかりしていないんじゃないかと思う。

金井 確かに、自己決定権が一人歩きしているよね。

ところで、性教協の人権教育から健康教育へのシフトというのは、とても危惧を覚える。まさにジェンダー概念から「文化的」という言葉すら外して「社会的性別」に切りつめた内閣府のジェンダー・コンセプトと相通ずる動きだと思うんですね。

それに関連して思い出したのは、日本社会にリプロダクティブ・ライツ/ヘルスの言葉が入ってくるのは、93年のカイロ人口開発会議の行動計画に使われて以来のことですが、そこで、女性の健康運動と取り組んできた女性運動側と政府の母子保健政策からリプロを取り入れた政策への転換のところで、リプロダクティブ・ライツに力点を置くか、リプロダクティブ・ヘルスに力点を置くかの、相当のせめぎあいがあったように記憶しています。

実は「ライツ」と「ヘルス」の間には相当に深いポリティクスが存在するのではなかということ。ですから「性の健康教育」も性の多様性や性的自己決定権へのエンパワーメントの視点を欠落したら、人権教育としての性教育が取り組んできた課題は骨抜きにされて、少子化対策の生ませる政策に回収されかねない。そういう紙一重の危うさにあることは、あらためて確認しておきたいところですね。

広瀬 「産ませる政策」と「産みたい人が産めるようにするための政策」の紙一重の違いみたいな危うさね。

●だれがフェミニストか

編集部 最後に、細谷さんが冒頭のほうでふれたメディアのことを語っていただいて、終わりにしたいと思うんですが。

金井 その前に、ちょっと一言だけ。いまの話から見えてきたのは、フェミニズムの側にもある種の知的怠慢として2つのことがあるのではない

か。1つは、男女の差異をなくすということは何か。もう1つはセクシュアリティの自己決定とは何か。この2つをきちんと詰めてこなかったことがあるかなあと。

そして、なぜそうなったかと言うと、身体とかセクシュアリティに関して、フェミニズムの知的関心や認識が、きちんと向けられてなかったんじゃないのかというのが、私の感想でした。

細谷 それは、我田引水ですね（笑い）。

広瀬 その怠慢というのは……。ジェンダーフリーという言葉に文句を言わなかったということも含まれます？ 私は「ジェンダーフリー」は、運動用語だと思っていたから。外野から言葉の使い方がいいとか悪いとか、言うべき筋のものでもないとは思っていて……。

金井 ジェンダー概念、と言ってもいいかもしれない。

広瀬 実は、私はジェンダーという概念が、そんなに研究者の中で違って使われていると思わなかったのよ。今回のあの「抗議文」の件は、意外だった。

金井 でも、ずいぶん幅があったでしょう。権力概念と捉える人もいれば、セックスに対する社会的構築概念と言う人もいればー。

細谷 細かく注意深く言おうとすれば似てくるんですよ。こういうことも必要だとか、ある種深めて広くするから。でもそれを運動とのつながりとか啓蒙的な意味で使うと、どうしても切り捨てて使うところがあるから、その結果、かなりバラバラになる。

広瀬 運動用語は動く人が動きやすいように使う掛け声のような言葉だと私は思ってて、その言葉が変だとか、この言葉を使えとか、外野から言うのは余計なお世話かなと思ったりするんだけど、違う？

細谷 僕は、礼節をもちつつ口出ししてもいい、口出ししたほうがいいと思う。研究者は、また市民でもあるんだし。

広瀬 「自己決定」というのも、ある意味運動用語なんじゃないですかね、特定の場所で効果を発揮する。たとえば中絶を他人から強制されたり禁止されないで、自分で決めたいというような場面では非常に分かりやすくその主張を表せる。けれどさっき細谷さんが言っていた中学生のセックスのような場面では、なんか出自の違う言葉が借り物のようによく使われるようで無理を感じる。

細谷 リブ出自の言葉だったら、「女（わたし）のことは女が決める」でしょう。それにはすでに、障害者運動との絡みなどで蓄積があると思う。

その部分では議論も深まって用法も適切になったと思うんだけど、いま言ったように、それが「自己決定」という一般的な言葉になったのはいつだか知らないけれど、それがどこでもかしこでも一人歩きして猛威をふるって、なんか逆らえない言葉になってる。

編集部 ええと、実はお話をうかがっていて、みなさんはフェミニストなのかどうかを尋ねたくなりました。レッテル貼りはよくないと重々承知の上で、です。

広瀬 私はね、純粹培養された生粋のフェミニストだと自分では思ってたんですよ。ただね、ひとはそう思っていないということが、ある時わかったの（笑い）。だから、言わなくなった。

細谷 僕は、フェミニストだとは、ぜんぜん思っていない。ジェンダー・アイデンティティも6割方男だし。もともと、あるバックラッシュ派のブログでは、「筋金入りのフェミニスト」なんて名指しされていた。

広瀬 ほんと？ ほめられてるじゃない（笑い）。

金井 私なんか、最近になってようやく、まあフェミニストって言っちゃおうと。

細谷 僕も、男でなけりゃ、フェミニストって言う。

●メディアも先入観から抜けきれない

広瀬 レッテル貼りメディアというのが、残りのテーマになるかしらね。03年から04年にかけて荒川区の、ある審議会（荒川区男女参画社会懇談会。バックラッシュ派の林道義、高橋史郎、八木秀次さんらも参加）の委員をしたんですよ。

金井 そこで林さんと一緒になったんでしょ。それは有名よ。

細谷 「ある審議会」なんて言わなくてもいいよ（笑い）。

広瀬 それで、その審議会、なかなか面白かったんですが、ただ、あれをメディアが書けなかったんです。荒川では最終的には議会に提出された条例案を撤回させたんですけど、審議会が設置された出だしから、そこまでの経過を書けないんですよ。

細谷 どういうこと？

広瀬 つまり、メディアはあそこで起こった流れを理解できなかった。それで、書けなかったの。私は何度か取材されて、私なりの考え方や審議会

を進めるシナリオを、それから審議の過程で起こったことを話したんですが、だからそのまま書けばいいのに、書けないんですよ。

金井 やばいと思ったんじゃないですか。

広瀬 違う、違う。要するに、記者があらかじめ描いた図式と私がしゃべってることが違うのよ。実際に起こっていることと、記者たちが先入観で作った図式が違うのよ。だからあの審議会が理解できなかったんだと思う。それで結局、記事を書けなかった。

金井 上のデスクかなんかが、ブレーキかけてるのではない？

広瀬 いや、違うんです。複数の新聞記者や雑誌記者の取材を受けましたけど、みんな同じような先入観をもっていて、それを確認したいような質問を私にして私の言葉で彼らの物語を言わせようとするわけよ。

ところがたとえば、審議の開始時点で林さんたちから私がにらまれたのは確かだけれど、あの審議の中で「ジェンダーフリー」という言葉を使わないでやろうと最初に言ったのは私だし、審議の中での対立構造は「林さんたちvs私」というような単純な形で進んでいたのでもないし、審議過程で問題になったことだって記者たちのシナリオにはないことなんかもあったりして、私がしゃべっている内容が、彼らのあらかじめのシナリオに位置づかないのよ。

だから書けない。ある雑誌の記者は、何時間も取材したあとで「今回は書けそうもないので諦めました」と言っていたもの。

金井 私は新聞の取材には絶対に応じないことにしている。だって、向こうは賛成派か反対派か、どっちかに色分けして取材しようとする。私がグレーのところを言っても、そのへんは無視されてしまう。チェックできなかったら、おそろしい記事になってしまう。

だから荒川区の話では、広瀬さんはフェミニストだから、当然こういうことを言うだろう。ジェンダーバッシングをしているのはあっちだから……という構図ね。

編集部 そうすると、メディアも、思いこみから抜け切れていない、ということになるんですね。私もその1人で（笑い）。
（了）

[表紙へ戻る](#)